

「だいじょうぶ」は「大丈夫？」

浦野 裕司

もう五年ほど前になるだろうか、救急車で搬送される体験をした。人生初の出来事である。

大のコーヒー好きである私の朝は、まず豆を挽くことから始まる。その日の朝も、ハンドミルをぐるぐる回してお気に入りの豆を挽いていた。ところが、である。ちよつと疲れて手を休めたのに、ミルが回り続けているのだ。おかしいなと天井を見上げると、天井もぐるぐる回っている。それも一・五秒で一回転するほどの結構な速さだ。真つすぐに立つこともおぼつかない。めまいというものを経験したことが無かったが、めまいとはこういうものなのかと、めずらしいものを発見したような

気分だった。

間もなく激しい吐き気に襲われた。「これはまづいぞ」と急に不安が押し寄せ、壁伝いに寝室に行き横になった。しばらくがまんして様子を見たが、見上げる天井は回転を続けたままだ。

「脳の病気だったら、えらいことになるぞ」と考え、吐き気をこらえて自己診断を開始。まず腕を天井に向けて挙げてみる。真上までちゃんと上がるし、勝手に降りても来ない。異常なしだ。手の平を、左右順番に握ったり開いたりしてみる。握れる。仰向けに寝たまの姿勢で足を上げ、交互に膝の曲げ伸ばしをする。左

右ともに異常なし。片目をつぶって天井を見る。左右どちらの目でも同じように見える。最後に言葉を発してみる。

「あいうえおかきくけこ…」
異常なく発声できた。どうやら脳の問題ではなさそうだ。三半規管系の異常なのだろう。少しだけ安心する。

しかし、いつまで経っても症状は回復しない。あいかわらず天井は回り続けている。心配した妻が「救急車を呼ぼうか」と言った。三半規管の病気なら、そう慌てることもないだろうと判断し様子を見る。十五分ほど経つても、めまいや吐き気は一向に収まる気配がない。妻が#7119の救急相談センターに電話してくれた。救急車を呼ぶべきかどうか迷った場合にかけると便利な窓口である。症状を伝えると、

「少し様子を見てください」
とのこと。それから三十分ほど経って、救急相談センターの方から電話があった。妻が、症状が変わらないことを話すと、

「すぐ救急車を手配します」
と言われたらしい。それから数分後、救急車のサイレンが近付いてきた。気が付けば、寝室にはいつの間にか救

急隊員がいた。階段を降りなければならないので、椅子型の移動台に乗せられ救急車へ。その頃になると、吐き気があまりにも酷くて目を開けるのも話をするのも辛くなっていった。車内で妻が症状を伝える。話を聞いた救急隊員は私の目を覗き、
「ああ、目がぐるぐる回っていますね」と妻に言う。妻も

「こんなにぐるぐる回るんですねえ」
と、感心したように言う。後から妻に聞いた所によると、私の眼球はぐるぐる、ぐるぐると見事に回っていたそうである。病院に着くまで、車内で救急隊員は、
「だいじょうぶですよ」

と、何度も言ってくれた。救急隊員の優しい声かけが嬉しかった。「だいじょうぶ」という言葉が、これほど安心感を与えてくれるものだということを感じたのも、人生初の体験だ。公務員の中で最も優しいのは、消防庁の救急隊員に間違いはない。

受け入れ可能な救急病院はすぐに見つかり、十分ほどで救命救急センターに到着。ベッドに移された。救急隊員は去り際に、
「私たちはこれで帰ります。だいじょうぶですよ」

と、救急車内と同じように優しい声で言ってくれた。そう言われると、本当に「だいじょうぶ」なような気がした。

さてその後だが、あまり「だいじょうぶ」ではなかった。私を診察してくれたのは、研修医と思われる若い男性医師。どうやら夜勤明けらしい。

「どうしましたかあ」

と、欠伸を噛み殺しながら、のんびりした口調で聞く。

「朝、起きたらめまいがして、そのうち吐き気が酷くなって…」

と、やっこのことで答える。ペンライトの光を目に当てて調べた後、

「では、両手を挙げてください。挙がりますかあ。ああ、挙がりますねえ。そのまま止めてください」

「はい、順に下ろしてください。次は足ですよ。曲がりますかあ。ああ、だいじょうぶですね」

「では、『あいうえお』って言ってください」

ひどい吐き気に襲われていなければ、

「それ全部、家でやっただんですけど」

と言いたかった。

医師は続いて、点滴の用意をした。

「点滴しますよ。チクツとします」

「では、このまま安静にしていってください。だいじょうぶですよ」

と告げて、眠たそうな表情でその場を去った。かれこれ三十分も経ったのだろうか。不安もピークに達しそうになった頃、若い女医さんが颯爽と現れた。後ろには先ほどの男性医師。女医さんは点滴のバックを調べてから、後に控えている男性医師の方を向いて

「なにこれ？何もしてないじゃない！」

と、厳しい口調で言い放つ。男性医師は、ただ俯くばかりだ。

「えっ、何もしてない。じゃあ、この点滴は？もしかして、ただの生理食塩水？」

と、不安は急激に膨らむ。点滴を始めた時の「だいじょうぶですよ」は、「僕は何もしてませんから、だいじょうぶですよ」という意味だったのかもしれない。

もしこれが一刻も争うような病気だったら、私はいつたいどうなっていたのだろう。頼りにならない男性医師（研修医に間違いない！）に比べ、後から現れた女医さんの素晴らしかったこと。

「症状から見て、たぶん『リョウセイホツサセイトウイ

メマイショウ』でしょう。すぐに楽にしてあげますからね」

こんな状態で「すぐに楽にしてあげますからね」という言葉を聞くとあまりよい気持ちはしない。おまけに長い病名で、何がなんだか分からない。しかし今は、美しい女医さん（マスクをしていたからよく分からないが）の言葉を信じるしかない。

「では、体をずらして頭をベッドの外に出してください。一時的に吐き気もつと酷くなるけど、だいじょうぶですからね」

「今度の『だいじょうぶ』は、どんな『だいじょうぶ』なのだろうか」

と不安がよぎる。しかし、てきばきと指示する女医さんの言葉に素直に従うことにした。

「はい、頭を左に向けますよ。えいっ！」

と言って、勢いよく幾度か頭を左にひねる。本当に吐き気は酷くなった。

「はい、今度は右ですよ。えいっ！えいっ！」

気合も鋭く、私の頭は幾度も右に曲げられる。

「ウエー」

あまりの吐き気に耐えられず、上半身を起こしたとたん

吐いてしまった。女医さんは、私が心置きなく吐けるよう、いつの間にか専用の容器を用意してくれていた。吐き気は少し軽くなった。女医さんの手慣れた治療のおかげで、「だいじょうぶ」の言葉が意味するところは、かなりよい方に変わった。

「じゃあ、立ってください」

「えっ、まだ吐きそうなんですけど」

「だいじょうぶです。私の肩につかまって、ゆっくり立ち上がり歩いてみてください」

半信半疑で立ち上がり、一歩前に踏み出してみた。

「おー、歩ける、歩ける」

女医さんは満足そうに声を上げる。たしかに、つい先ほどまでは世界がぐるぐる回っていて、立つことすらままならなかったのに、なんとか歩くことができた。女医さんは、

「やっぱり、良性発作性頭位めまい症でしょう。もう帰っていいですよ。帰って落ち着いたら、家から近い病院に行ってください」

「先生、リョウセイホツサセイ、なんとかってどんな病気なんですか」

「悪性ではないから良性、急に起こるから発作性、頭の

<「だいじょうぶ」は「大丈夫？」>

位置で起きるめまいだから『良性発作性頭位めまい症』。耳石の一部がはがれて別の場所に動いたために、ぐるぐる回っているように感じてしまうんです。今、耳石をもとに戻したから、もうだいじょうぶですよ。そうそう、女子サッカーの、澤穂希さんも同じ病気で少し休んできたことがありますよ」

この「だいじょうぶ」は「信頼できる大丈夫」だと確信した私は、

「じゃあ、ワールドカップサッカーにも出られますね」と、つい軽口をたたいてしまった。女医さんは困ったような表情を見せたかと思うと、別の患者のベッドへと向かって行った。あの女医さんに診てもらえば、次の患者さんも大丈夫に違いない。